

旧加賀藩政時代の虫塚から学ぶこと (続編・その1)

石川県農業総合研究センター
資源加工研究部 生物資源グループ

専門研究員 森川千春

石川県小松市の埴田町と岩淵町に天保年間建立の虫塚がある。この地域(当時は能美郡徳橋組)を支配していた十村役・田中三郎衛門によるものだ²⁷⁾。十村役とは名主・大庄屋に相当する加賀藩独特の役職である⁶⁾。農民の中から有力な者が任命され、三代藩主・利常の時代に確立された改作法のもと、郡奉行、改作奉行の指揮により農村支配・年貢収納を担当した⁴⁴⁾。以前、この二つの虫塚について「旧加賀藩政時代の虫塚から学ぶこと(前編・後編)」^{58, 59)}として紹介した。

「前編」では、埴田の虫塚の碑文が、わずか175文字の中に極めて多くの情報を含み、現代にも通用する、簡潔明瞭な科学論文であることを検証した。「後編」では二つの虫塚を正・副の一对と考え、碑文の175文字：122文字の比率がそのまま、それぞれに埋められた虫の23俵：16俵という比率に一致していることを示し、碑文は後世への教訓を残すだけでなく、呪術的な悪霊封じも兼ね合わせていると考えて、二つの虫塚が建つものと同じ方角、すなわち戌亥(北西)と辰巳(南東)に、それぞれ「高根祭」と「辻固め」という悪霊除けを行う愛知県の「花祭り」との関係を考察して、二つの虫塚是一对で「結界」を形成したものの、との推定を行った。

ここで当然さらなる疑問が残るであろう。「そもそも虫を23俵：16俵という比率で分配したのはなぜか」「163cm：135cmという高さの比に意味は無いのか」ということである。これについても、ある結論に達していたのであるが、あまりにも呪術的であったために「農業と科学」への掲載をためらった。近年「科学を装った呪術」があまりにも多いからである。しかし傍証を積み重ねるにつれて、虫塚の建立は真摯な「呪術を装った科学」とあると考えるに至り、ここに続編として私・試

案を提示したい。

<二つの虫塚の比率が意味するもの>

まず二つの虫塚のデータを再確認しよう。

(碑文は図1参照)

埴田の虫塚 高さ：163cm (十今は土中にある
礎石：文献によると1尺)

碑文文字数：175文字

埋められた虫の量：23俵

当初建立されたままの位置に建つ

岩淵の虫塚 高さ：135cm (礎石なし)

碑文文字数：122文字

埋められた虫の量：16俵

「西光寺跡」から明治時代に移築されている

図1. 埴田(左)と岩淵の碑文

天保十年九月
後年ノ記録ニ建之畢
愁 ウスカルベシ 余ハ除蝗録ニ委シ 虫ノ愁ヲ恐レ
此未虫生ル時ハ草修理ノ頃ハヤク 木実油ヲ用ユレバ
布モメン袋ヲ以テトリ集メ候分 此所ニ二十三俵許埋ラク
中稲晚稲次第二ツヨク 稲多枯 何レモ及難儀 右虫
コロヨリ 俗ニコヌカ虫俄ニ生ジ ワセライイカレカハリ
草生ヨク早稲穂ニ出 一統悦ビ賑ヒ候内 同月中旬ノ
ア、イカナル故ニヤ 當年七月上旬マデ順気ムルイ

當年七月中旬頃ヨリ俄ニ稲株ヨリコヌカ虫多生シ
悉稲ヲ枯シ一統ナンキニ及布木綿ノフクロヲ以テトリ
集メ候虫此所ニ拾ハ俵埋ラク若此未虫生ル時ハ草修理ノ
頃早ク木ノ實油ヲ用ユレハ愁ウスカルヘシ余ハ除蝗録
ニ委シ虫ノ愁ヲオソレ後年ノ記録ニ建之畢
天保十年九月建之

さっそく、「23俵：16俵」に分配したのはなぜか?というところから考察を始める。23÷16=1.4375(この俵数比にあわせ以下、比率は小数点5位の四捨五入で用いる)。期待した黄金比1:

$(1+\sqrt{5})/2 \approx 1:1.6180$ ではなかった。しかし、日本古代建築や伽藍配置に見られる大和比 $1:\sqrt{2}$ ($1:1.4142$)があった(ピラミッドは黄金比とともに大和比も兼ね備えている)⁴⁾。少し値が違うが、この総俵数ではこれ以上、大和比に近似できない。大和比に従って虫を入れた俵を分配したのではないか。

さらには、なぜ、埴田にだけ礎石があるのか？ 礎石分の高さを加えると $163\text{cm}+30\text{cm}=193\text{cm}$ 、高さの比は $193\text{cm} \div 135\text{cm} \approx 1.4296$ 。これまた大和比に近い値、そして俵数比により近い値になる。礎石は大和比に近づけるために付け加えたものではないのか。大和比よりも俵数比に近いのは虫の霊を「封印」するため“実際の俵数比を重視した”と考える。すなわち1.4375倍の虫を1.4142倍で封印するのは重さが足りない、バランスが悪いということである。俵数比で逆算してみよう。

$193\text{cm} \div 1.4375 \approx 134.26\text{cm}$ 、誤差は約0.74cm (7.4mm！：換算すれば約0.25寸)である。同様に碑文文字数の俵数比による逆算は、 $175\text{文字} \div 1.4375 \approx 121.74\text{文字}$ 、誤差は約0.26文字である。俵数・文字数・高さの比は統一されていると考えるべきだ。

そしていよいよここで、虫塚の「伽藍配置」である。二つの虫塚の位置を対角に置く四辺形を考える。この東西辺：南北辺 $=1:\sqrt{2}$ とすると、今は移築されている岩渕の虫塚のあるべき位置は、岩渕の表通りにピッタリと重なってくる(図2・網掛け・y部分)。まさにこれこそ域外からの悪霊の侵入を遮断する「辻固め」であったのだ！

当時の作業順序は、おそらくこの逆を辿ったであろう。①まず大和比 ($1:\sqrt{2}$) の位置に二つの建立地を決定する。②高さの比も文字数比も当初は $\sqrt{2}$ 倍であった。③虫を入れた総俵数から1.4375倍までしか近似できないことがわかり、礎石により約1.4375倍となるよう高さを調節する。④碑文の文字数も再調整し約1.4375倍に近づけるよう変更した。

碑文の中には、この変更の“痕跡”が残されている。埴田の碑文は「稲多枯」「及難儀」など漢文調が入っているのに対し、岩渕は「悉稻ヲ枯シ」「ナンキニ及」のようにカナを多用した読み下し文

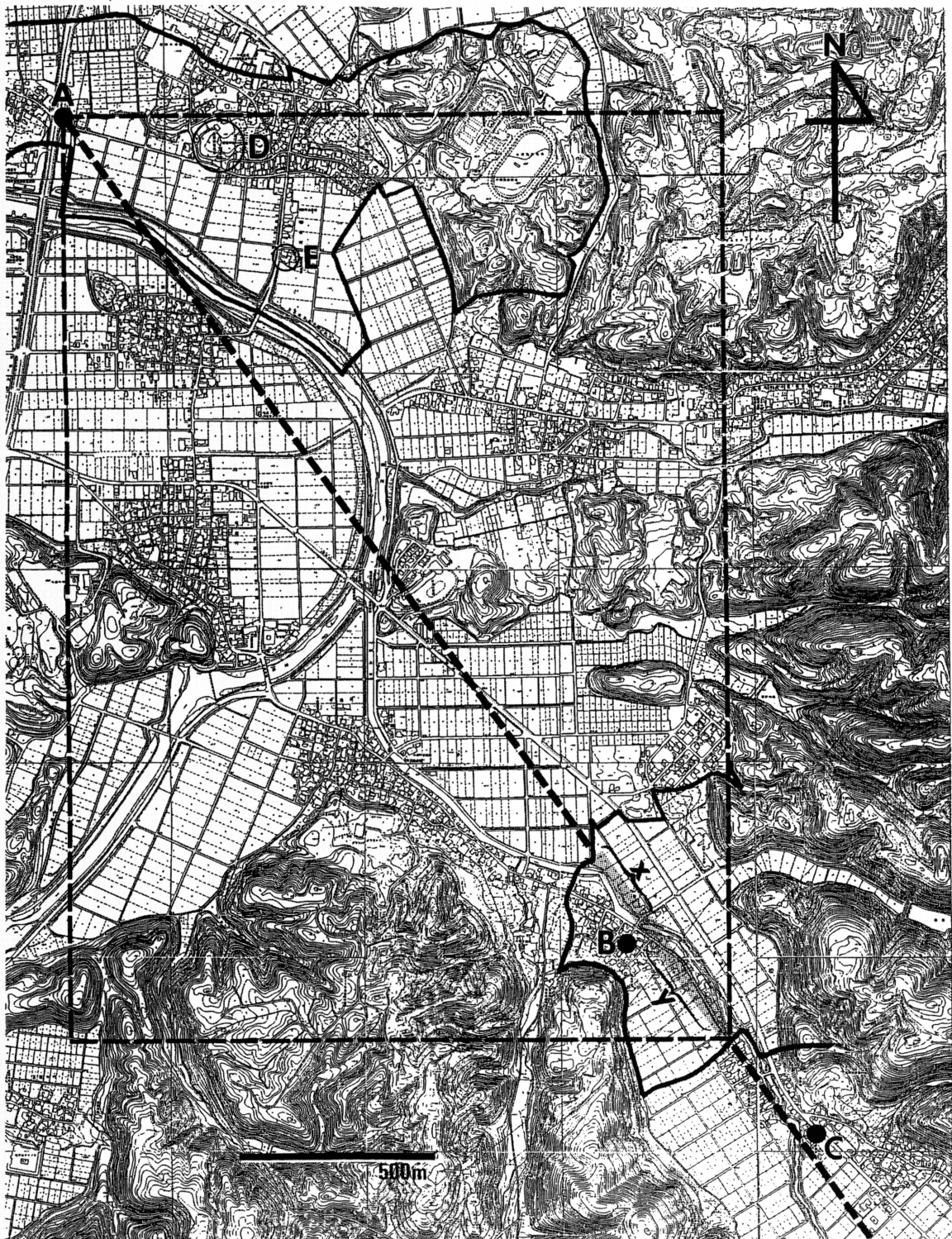
調になっている(図1)。それゆえ、埴田でカナであったものを岩渕で漢字にするのは不自然と考える。該当するのは2箇所。すなわち岩渕の碑文の「木綿」「早く」であるが(図1)、これを「モメン」「ハヤク」のカナに戻すと、2文字増える。 $122\text{文字}+2\text{文字}=124\text{文字}$ 、これが元の碑文だ。 $175\text{文字} \div 124\text{文字} \approx 1.4113$ 、これ以上、大和比に近似させるのは困難である。この場合の大和比による逆算は $175\text{文字} \div 1.4142 \approx 123.74\text{文字}$ 、誤差は約0.26文字である。

虫塚の設計、配置は大和比に基づいている。この比率は当時としては決して特殊なものでも、珍しいものでもない。大工の用いる指金(曲尺)は、表面に尺寸が、裏面には尺寸を $\sqrt{2}$ 倍した目盛り(裏目)が刻まれていた⁴⁾。しかし、石碑の高さという構造物だけでなく、俵数と碑文文字数も関連させ、さらには長辺でおおよそ2kmにおよぶ広大な範囲の配置にまで用いたところに特異性がある。

<岩渕の虫塚はどこにあったのか？>

岩渕の虫塚の建立地「西光寺跡」について一つの議論があった。「埴田の天山」捜し⁵⁹⁾でお世話になった縁で、山越隆館長から、平成17年1月23日に小松市立国府公民館の歴史研究会の会合にお誘い頂いた時のことである。「岩渕の表通り沿いで東の村境付近(図2・y)」という「大和比」による推定に対し、研究会会長・高酋外氏によると「山寄りの斜面の近くにあり崩れそうになったために一回だけ移築した」とされる一方、同研究会の重鎮・中梅子氏によると「山寄りではなく平地であり、現在の位置と川を挟んで反対側、ケアハウス前の水田になっている場所にあった」との説で一致をみななかった。しかし全くの私見であるが、後日考えるに、この全ての条件をほぼ満たす場所があったのである。「斜面の下」ではなく「斜面の上」と考えればよいのだ。岩渕に入るにはケアハウス前を右折して滓上川(「滓上」は白山本宮に祀られていた地神「糟神」のこと¹⁰⁾)にかかる岩渕大橋を渡った⁵⁹⁾。川の両岸は落差5メートルはある“急斜面”である。治水の悪かった時代を考えると、水嵩が増すと崩れ落ちそうだ。すなわち「ケアハウス前の滓上川右岸近く・岩渕大橋付近から下流域約300mの区間」(図2・x)で3つ

図2. 「岩渕の虫塚」 建立地の推定



「埴田の虫塚」(A)を起点に、岩渕町に向かって東西辺:南北辺=1: $\sqrt{2}$ の四辺形を書くと、「岩渕の虫塚」(B)の本来あるべき位置が示される(網掛け部分x~y)。岩渕の虫塚推定ラインは湊上川右岸(x)をかすめ岩渕町の表通りに重なっていく(y)。さらに延長すると仏御前の墓と屋敷跡(C)をかすめる。Dは「徳橋神社」、Eは「天山の推定地」を示す。太実線で囲んだ地区は現在の埴田町(左上)と岩渕町(右下)の範囲を示す。本図は1:2,500国土基本図VII-IC 55-1~4, 45-3~4(小松市)より縮小改変した。

の条件「崩れやすい斜面の近く」「川の右岸ケアハウス前の水田になっている平地」「大和比」が満たされるのである。

<大和比と結界の意味>

ここで、大和比に基づいた配置が結界の形成に持つ意味を考えてみたい。1:√2という四辺形は正六面体の内部を斜めに横断する面に一致する⁴⁾(図3)。正六面体を45度回転させると、この面を結界に収めるべき土地に相当させることができる。地下も上空もピラミッドを思わせる形状の結界で保護する形となる正六面体の中央に四辺形は位置するのである(図4)。

図3. 正六面体中の大和比

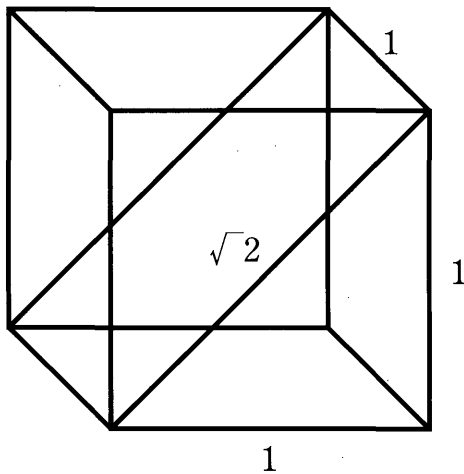
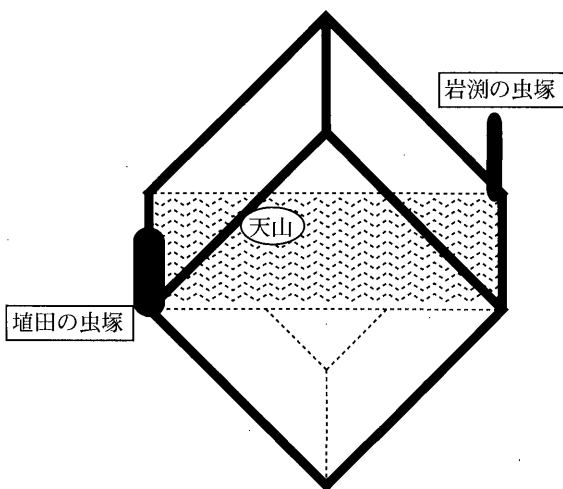


図4. 虫塚の配置に見る結界模式図



このような結界の形成を考えると「岩瀬」という立地がもう一つの意味をもってくる。岩瀬の東隣、原村の仏御前の崇りの伝承である。京の都から故郷・原村へ戻った仏御前が、妊娠したという噂を立てられ抗議の自殺をした、または嫉妬に狂った村の女たちに殺され、そのとき妊娠中であった、ということから「此村に産婦ある時、必ず窓を閉る、若し閉ぢざれば大風吹と里人言傳ふ」(緩帯編)「此村に孕む者あれば、由縁々々に他の村に引越し子を産みて後帰る、若佛が原村にて産をすれば、必ず大風吹きて作毛を損ふ、是を原風といふ」(三州奇談)と伝えられる⁹⁾。出産時窓を閉めきらなければ、あるいは村外の縁者を頼って引越して出産しなければ「作毛(稲穂の稔り)を損なう大風」がおこるのだ。天保七年八月十三日に大風雨があり能美郡にて出火、同十五日米穀欠乏により食料品の領外への輸出禁止令、同九月六日には商人が米穀買い占めと密輸により斬刑に処せられた⁴⁹⁾。翌・天保八年にも徳橋組は大風にみまわれている²⁷⁾。天保十年の建立に際して、原村は結界の外に置かなければならなかった。原村に対して結界をはる必要があったのだ。これは原村村民の村外での出産の安全を図るものでもあったであろうし、それよりなにより、結界ができた後の大風の原因は原村ではないことになる。原村の風評被害を封じる目的もあったのかもしれない。岩瀬の虫塚推定ラインの延長は仏御前の墓所をかすめている(図2)。

<陰陽道と虫塚>

東西南北に正対した大和比の四辺形を用いた結界による除災、を成し遂げた背景は何だったのだろうか。十村役・田中家が父祖とする鬼一法眼は「義経記」に「陰陽師の法師」とある。次回(続編・その2)では「陰陽道」と「虫塚」の関係について考察する。

<引用文献は、(続編・その3)に一括掲載します>